

岡ノ台遺跡 発掘調査報告書

財団法人

山形県埋蔵文化財センター



6-1995-1179-01

1994

財団法人 山形県埋蔵文化財センター



おか の だい
岡ノ台遺跡
発掘調査報告書

平成6年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター



1995-1179

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、岡ノ台遺跡の調査成果をまとめたものです。

岡ノ台遺跡は山形県の南西部に位置する西置賜郡白鷹町にあります。西置賜北部に位置する白鷹町は、県内を縦走する最上川の東西に広がる町域で、西方に朝日山系の山々が連なり、稜線と緑の自然豊かな景観の地域です。それを物語るかのよう
に、最上川に注ぐ中小河川沿いに形成された河岸段丘面等から土器や石器の採集されることがあります。

調査では、数多くの遺構・遺物が検出され、広い分布域をもつ縄文時代から平安時代までの複合遺跡であることが明らかになりました。

埋蔵文化財は祖先が長い歴史の中で創造し育んできた貴重な遺産といえます。私たちは国民的財産の文化財を大切に保護し、さらに郷土の歴史の中で培われた文化を後世に引き継がねばなりません。一方、平和で豊かなくらしは私たちが等しく切望しているところです。近年、高速自動車道やバイパス、農業基盤整備事業など国県等の事業が増加していますが、これに伴い事業区域内で発掘調査を必要とする遺跡が増加の傾向にあります。

事業区内の遺跡の調査は、埋蔵文化財保護と開発事業実施のため、適切かつ迅速に行われることが今日求められています。こうした要請に適切に対処するとともに埋蔵文化財調査体制の充実を図ることが急務とされ、平成5年4月に財団法人山形県埋蔵文化財センターが設立されました。職員一同、県民と関係各位の要望に応え本県の埋蔵文化財保護のため一層の努力をいたす所存です。今後とも当センター発足の目的が遂行されるようご支援ご協力を賜わりたくお願い申し上げます。

本書が文化財保護活動の啓蒙普及、学術研究、教育活動などにおいて皆様のご理解の一助ともなれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力をいただいた地元の方々をはじめ関係各位に心から感謝申し上げます。

平成6年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター
理事長 木場清耕

例 言

- 1 本書は一般国道287号道路改良工事に係る「岡ノ台遺跡」の発掘調査報告書である。
- 2 調査は山形県の委託により財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 調査要項は下記のとおりである。

遺跡名	岡ノ台遺跡(DSTOD)	遺跡番号	昭和63年度登録
所在地	山形県西置賜郡白鷹町大字群藤字岡ノ台		
調査期間	平成5年4月1日～平成6年3月25日		
	前期 平成5年5月11日～平成5年7月22日		
	後期 平成5年10月20日～平成5年10月22日		
	平成5年11月1日～平成5年11月19日 67日間		
調査主体	財団法人山形県埋蔵文化財センター		
調査担当者			
	調査研究課長	佐々木洋治	
	主任調査研究員	野尻 侃	
	調査研究員	名和 達朗	
	嘱託職員	渡辺 薫	
- 4 発掘調査及び本書を作成するにあたり、山形県土木部長井建設事務所、白鷹町教育委員会、(社)長井・西置賜地域シルバー人材センター、白鷹町立東根小学校等関係各機関の協力を得た。ここに記して感謝申し上げます。
- 5 本書の作成・執筆は、名和達朗、渡辺 薫が担当した。編集は安部 実、伊藤邦弘が担当し、全体については、佐々木洋治が監修した。
- 6 写真測量、遺物実測図のうち打製石器については、株式会社シン技術コンサルに実測業務を委託した。
- 7 出土遺物、調査記録については、財団法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。

凡 例

- 1 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。
 ST 竪穴住居跡 SK 土坑 EL 炉跡・カマド跡 SD 溝跡
 SP・EP 柱穴・ピット RP 完形・一括遺物 P 土器
- 2 遺構番号は、現地調査段階での番号をそのまま報告書の番号として踏襲した。
- 3 報告書執筆の基準は下記のとおりである。
 - (1) 調査区概要図・遺構配置図・遺構実測図中の方位は磁北を示している。
 - (2) グリッドの南北軸は北側調査区が、N-37° 32'-E、中央調査区が、N-42° 20'-E、南側調査区が、N-46° 5' 40"-Eである。
 - (3) 遺構実測図は、1/40・1/60縮図で採録し、各挿図毎にスケールを付した。
 - (4) 土層断面図中のスクリーン・トーンは石、礫または、焼土を示す。また、遺構配置図・遺構実測図中のスクリーン・トーンについては凡例で示した。
 - (5) 遺構計測表中の()内の数値は、検出部分の計測値、または、推計値を示している。また、深さは確認面からの深さである。
 - (6) 遺物実測図・拓影図は、1/2・1/3・1/4で採録し、各々スケールを付した。遺物図版については、任意の縮尺とした。
 - (7) 土器の断面のみ実測したものについては、左側に外面を、右側に内面を示した。
 - (8) 遺物図版中の番号は挿図番号を示している。
 - (9) 遺物計測表中の()内の数値は、図上復元による推計値、または、残存値を示している。また、出土地点欄の層位で、ローマ数字は遺跡を覆う土層(基本層序)を表している。

目 次

第I章 調査の経緯	
1 調査に至るまでの経過	1
2 調査の経過	1
3 遺跡の概観	2
第II章 遺構と遺物	5
1 遺構	5
2 遺物	15
第III章 まとめ	28
報告書抄録	29

表

表-1 遺構計測表	14
表-2 遺物計測表	27

挿 図

第1図 遺跡位置図	2
第2図 調査区概要図・北側調査区	3
第3図 調査区断面概略図・中央調査区・南側調査区	4
第4図 ST2住居跡・EL250伊跡	6
第5図 ST6住居跡・EL251伊跡	7
第6図 ST3・7住居跡	8
第7図 ST8住居跡・EL17カマド跡	9
第8図 ST9住居跡・SD18溝跡	10
第9図 土壌群(1)	11
第10図 土壌群(2)	12
第11図 土壌群(3)	13
第12図 土器実測図(1)	17
第13図 土器実測図(2)	18
第14図 土器拓影図(1)	19
第15図 土器拓影図(2)	20
第16図 土器拓影図(3)	21

第17図 土器実測図(1)	22
第18図 土器実測図(2)	23
第19図 土器実測図(3)	24
第20図 土器実測図(4)	25
第21図 土器実測図(5)	26

図 版

図版1 航空写真
図版2 北側調査区空中写真
図版3 北側調査区空中写真
図版4 調査風景 調査説明会 空撮委託状況
図版5 ST2住居跡 EL250伊跡 出土土器
図版6 ST6住居跡 EL251伊跡 出土土器
図版7 ST3住居跡 ST7住居跡
図版8 ST8住居跡 EL17カマド跡
図版9 ST9住居跡 SD18溝跡
図版10 土壌群
図版11 出土土器(1)
図版12 出土土器・土製品(2)
図版13 出土土器(3)
図版14 出土土器(4)
図版15 出土土器(5)
図版16 出土土器(6) 出土土器・石製品(1)
図版17 出土土器・石製品(2)
図版18 出土土器(3)
図版19 出土土器(4)

第1章 調査の経緯

1 調査に至るまでの経過

置賜北部に位置する白鷹町は、置賜盆地を北上する最上川の東西に広がる町域で、西方に朝日山系の山々が連なり、稜線と緑の自然豊かな景観の地域である。それを物語るかのように、最上川に注ぐ中小河川沿いの河岸段丘面等には、時折土器や石器が確認される。

管内の畔藤地区に一般国道287号道路改良工事が計画され、県教委では遺跡保護と開発事業との調整を進めるため、昭和63年11月に道路計画区域について、遺跡詳細分布調査による現地表面踏査に入りました。本遺跡は、その時新規確認され、同年度に登録されたものである。その後、間を置いて平成4年10月に調査可能な事業区内について、遺跡の範囲や深さ等の詳細な内容を確認・記録するため、27ヶ所の試掘坑(約1平方m)を入れ調査を実施した。その結果、耳堂川から置賜思川の間、東西500m・南北450mの範囲に縄文時代の土器や石器の出土が確認され、特に思川左岸寄りに顕著である。さらに、平成5年1月遺跡南側での工事用仮設道路工事に伴う立会い調査では、耳堂川右岸近くの畑地から古墳時代の土師器類も確認された。それにより路線内の分布域が、北側が縄文時代、南側が古墳時代の地区に分けられることが明らかになった。ちなみに遺跡の範囲は、分布調査実施区域と地形観察から、東西500m・南北450mの広さが想定される。

次に、この分布調査内容を基に関係機関による協議が行われた結果、財団法人山形県埋蔵文化財センターが県から今回委託を受け、本遺跡の路線内に係る区域について発掘調査を行い遺跡を記録保存することになったものである。

2 調査の経過

事業区内の調査開始時期の関係から発掘調査を前期・後期に分けて行い、また、分布調査結果では、置賜思川左岸と耳堂川右岸寄りに2つの分布範囲がみとめられたことや、後期調査対象区域の設定により、便宜上調査区域を、北側調査区、中央調査区、南側調査区の3つに区分した(第2図)。前期調査は、北・南側調査区について、後期調査は、中央調査区と南側調査区の一部南東側拡張についてそれぞれ実施した。

調査区域の設定後、発掘は重機による表土の掘りから始めた。各調査区については、5mを単位とするグリッドを設定した。その座標基準線は、北・南側調査区はそれぞれの地区の道路センター杭方向に合わせ、中央調査区は同区の南側に近接する道路幅杭間から任意に設定した。

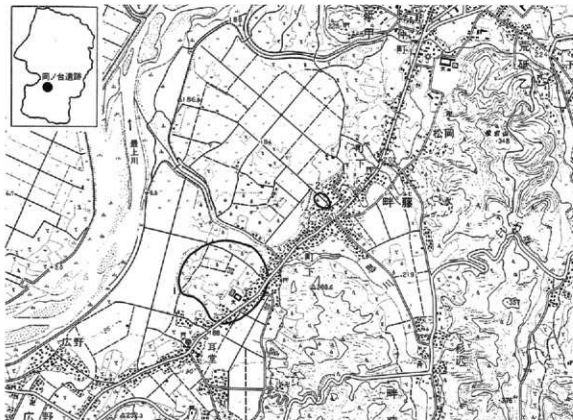
次に、手掘りでの全体の面削りを進めながら、土色変化等による遺構の検出や出土物の把握を行い、それと並行して必要の都度、写真撮影や平面及び土層断面の実測等による諸記録作業を順次行った。なお、北側調査区の遺構平面図の記録は、ラジコンヘリによる空中撮影を委託して実施した。

調査の結果については、平成5年7月16日に調査説明会を開催して、概況を報告した。

3 遺跡の概観 (第1～3・6～8図)

遺跡は、町立東根小学校西側に広がる畑地に分布し、最上川右岸の堤防を望む河岸段丘上に立地する。北は置賜恩川、南は耳堂川が東西に流れ、遺跡の南北端を区画する。東方は、南北に連なる白鷹山系の丘陵地である。遺跡の一带は、果樹やハウス栽培等の野菜畑で、恩川左岸から南西方向に緩い傾斜を呈する。そのさらに西方は、沖積地で堤防沿いまで水田がつづく。前述の分布調査では、中央部よりも両河川沿いに遺物の出土が顕著にみとめられた。標高は、189～193mを測る。周辺の遺跡では、北東約500mの一段高位の河岸段丘面に黒藤館跡が分布する。

遺構・遺物は、北側調査区のグリッドY軸26から北側に分布密度が高く検出された。置賜恩川左岸沿いは幾分微高地を呈し、そのため同区は、遺跡内でも高まりに位置する。南から北側に竪穴住居跡、全体的に土壇・柱穴、北東壁寄りに溝跡の遺構分布がみとめられた。土層は、耕作土と地山である黄褐色シルト質砂・砂利の間に遺物包含層の黒色ないし暗褐色土が堆積する。遺構確認面は地山上面である。同区から南方50mの地点の中央調査区は、調査区の西壁寄りに竪穴住居跡・土壇、北東壁寄りに土壇・柱穴が分布する。遺構・遺物確認面は一樣ではなく、住居跡付近は黒褐色シルト、北東付近は、茶褐色細砂質シルトである。ただ、その堆積順序の対比はできなかった。南側調査区は、耳堂川右岸沿いである南西側寄りに竪穴住居跡・土壇・溝跡・柱穴が分布する。遺構・遺物確認面は、地山の黄褐色シルト上面である。農道北側の楕円形プランは、土層の検出線によるものである。



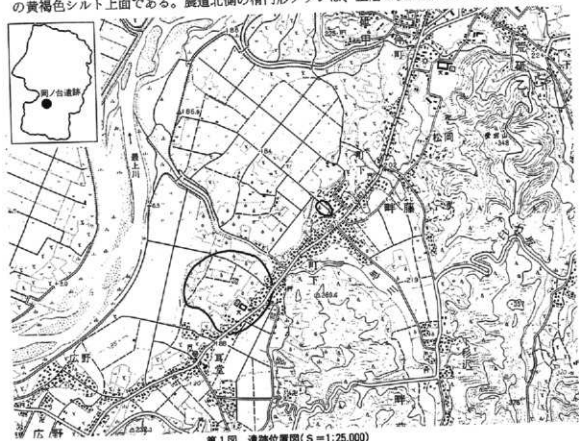
第1図 遺跡位置図 (S=1:25,000)

- 1 岡ノ台遺跡
- 2 黒藤館跡

3 遺跡の概観 (第1~3・6~8図)

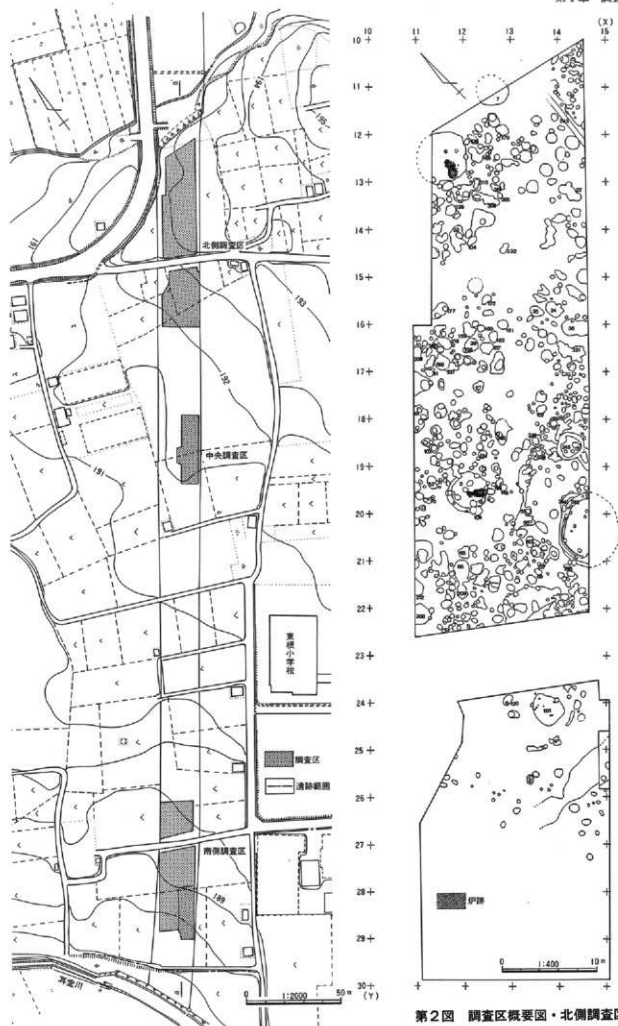
遺跡は、町立東根小学校西側に広がる畑地に分布し、最上川右岸の堤防を望む河岸段丘上に立地する。北は置賜思川、南は耳堂川が東西に流れ、遺跡の南北端を区画する。東方は、南北に連なる白鷹山系の丘陵地である。遺跡の一角は、果樹やハウス栽培等の野菜畑で、思川左岸から南西方向に緩い傾斜を呈する。そのさらに西方は、沖積地で堤防沿いまで水田がつづく。前述の分布調査では、中央部よりも両河川沿いに遺物の出土が顕著にとめられた。標高は、189~193mを測る。周辺は、北東約500mの一段高位の河岸段丘面に黒藤館跡が分布する。

遺構・遺物は、北側調査区のグリッドY軸26から北側に分布密度が高く検出された。置賜思川左岸沿いは幾分微高地を呈し、そのため同区は、遺跡内でも高まりに位置する。南から北側に竪穴住居跡、全体的に土壇・柱穴、北東壁寄りに溝跡の遺構分布がみとめられた。土層は、耕作土と地山である黄褐色シルト質砂・砂利の間に遺物包含層の黒色ないし暗褐色土が堆積する。遺構確認面は地山上面である。同区から南方50mの地点の中央調査区は、調査区の西壁寄りに竪穴住居跡・土壇、北東壁寄りに土壇・柱穴が分布する。遺構・遺物確認面は一様ではなく、住居跡付近は黒褐色シルト、北東付近は、茶褐色細砂質シルトである。ただ、その堆積順序の対比はできなかった。南側調査区は、耳堂川右岸沿いである南西側寄りに竪穴住居跡・土壇・溝跡・柱穴が分布する。遺構・遺物確認面は、地山の黄褐色シルト上面である。農道北側の楕円形プランは、土層の検出線によるものである。

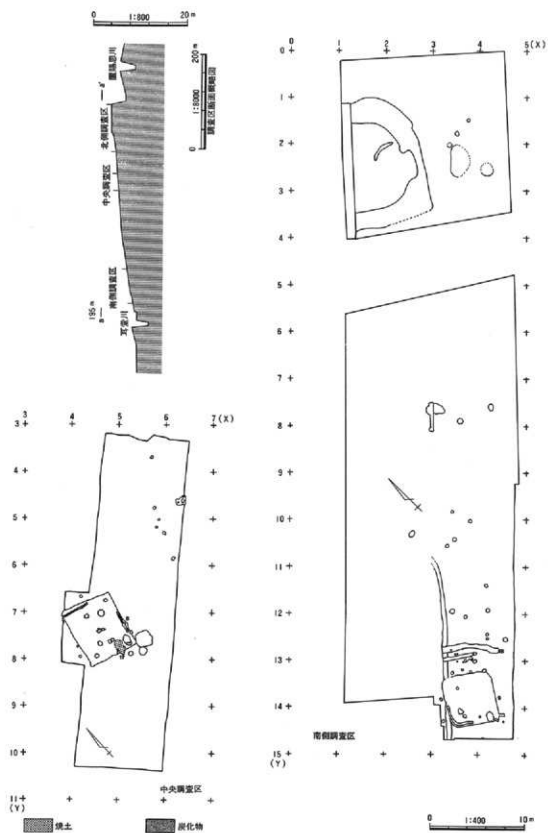


第1図 遺跡位置図 (S=1:25,000)

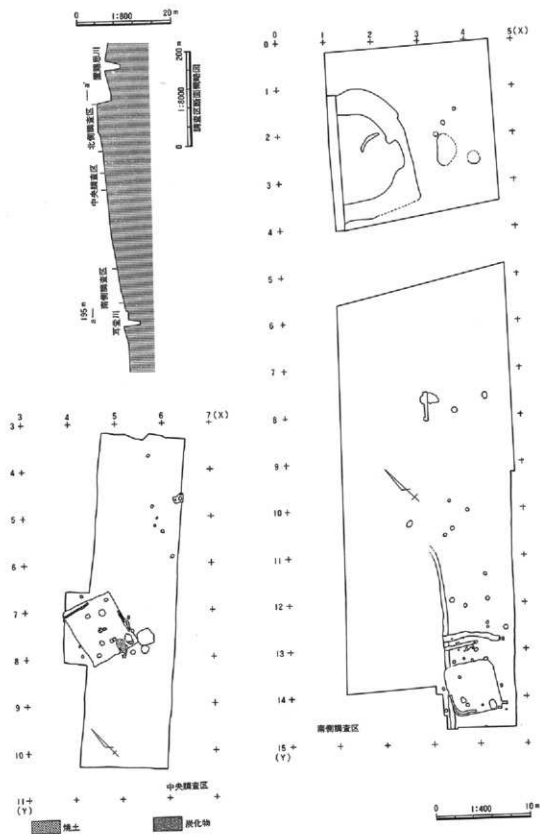
- 1 岡ノ台遺跡
- 2 黒藤館跡



第2図 調査区概要図・北側調査区



第3図 調査区断面概略図・中央調査区・南側調査区



第3図 調査区断面概略図・中央調査区・南側調査区

第II章 遺構と遺物

1 遺構

主に住居跡について概括する。各遺構の大きさ等については、表2にまとめた。

2号住居跡(第4図 図版5)

12-19に位置する。平面形は、円形を呈する。壁は、ほぼ直線的に立ち上がる。床面は、少し凹凸をもち、中央付近がくぼむ。柱穴は、床面から4本検出できたが南西側は重複位置にあり、全体構成は不明であるが配置状況から3本の主柱穴構成が推定される。周溝は、西側半分に検出できた。炉跡は、床面中央から南東壁際にかけて構築され、先端部に2つ重ねの土器(図版5)埋設炉を伴う複式炉である。主軸方向は、N-57°-Wである。

6号住居跡(第5図 図版6)

11-12に位置する。プラン東側約2/3の検出である。推定できる平面形は、不整形である。壁は、北側壁際に凹凸を示すがほぼ直線的に掘り込まれ、床面は、ほぼ平坦である。炉跡は、床面南側寄りに構築され、先端部に土器(図版6)埋設炉を伴う複式炉である。検出時は、1基のみの確認であったが、断面調査の結果、下に重複してさらに1基の土器埋設部が検出できた。主軸方向は、N-6°-Eである。

7号住居跡(第6図 図版7)

12-11壁際で、プランの一部分の検出である。平面形は、略円形が推定される。壁は、東側がやや緩やかで西側は垂直気味である。床面は、ほぼ平坦である。周溝は、南壁際に部分的にみとめられた。柱穴は、確認できなかった。

3号住居跡(第6図 図版7)

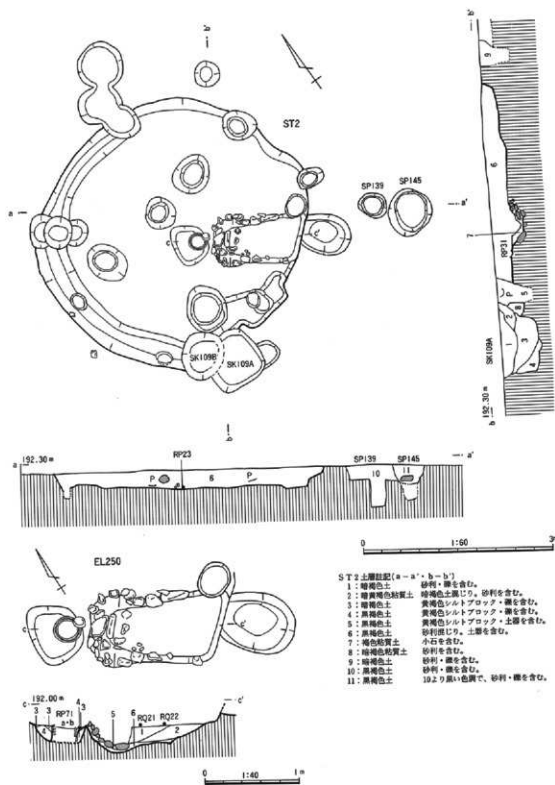
14-20壁際にプランの約半分を検出。推定平面形は、円形である。壁は、直線的で南壁は斜傾する。床面は、凹凸をもつ。周溝は、壁際に沿って比較的深く明瞭に確認できた。柱穴は、調査区土層断面に主柱穴と考えられる1本を検出できた。

8号住居跡(第7図 図版8)

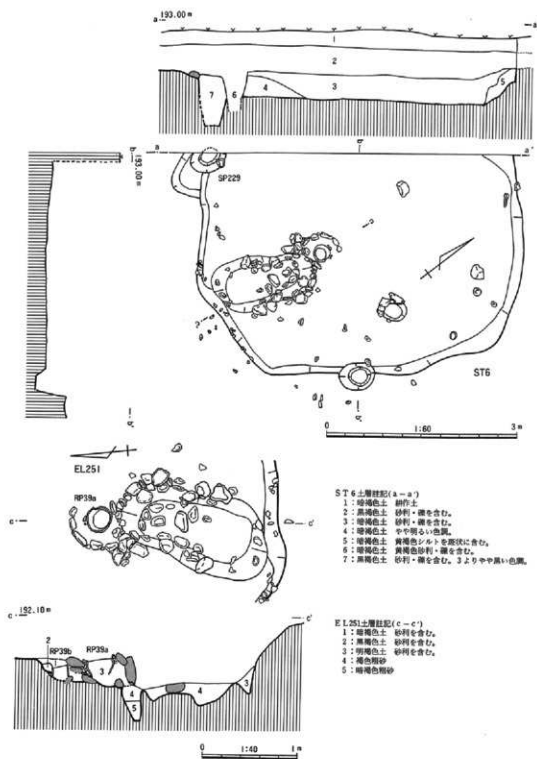
4-7に位置する。南北に長い方形プランである。主軸方向はN-25°-Eである。壁は、西側が緩傾斜で直線的に掘り込まれている。床面は、ほぼ平坦でその下部にも遺物の出土がみとめられた。整地ないしは重複遺構の覆土の可能性がある。南側の壁中央東寄りにかマドをもつ。その主軸方向は、N-29°-Eである。北側壁際には、住居の部材と考えられる炭化材を出土。

9号住居跡(第8図 図版9)

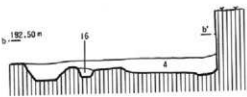
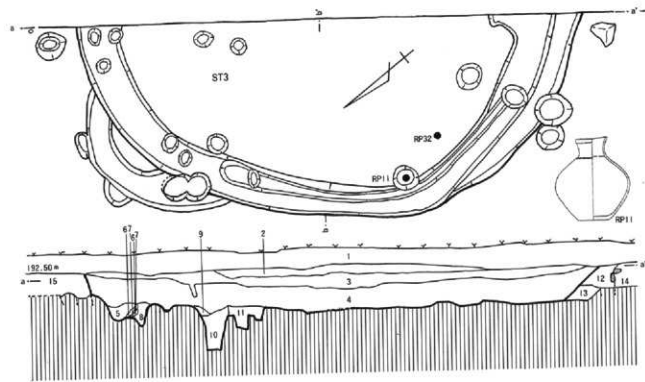
3-13に位置する。ほぼ正方形のプランである。主軸方向は、N-34°-Eである。壁は、直線的に掘り込まれ、南西隅に浅い周溝状の溝をもつ。床面は、凹凸をもつ。その下部は、炭化物を含む土層堆積がみとめられ、地山面で凹凸を示す。



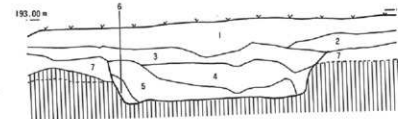
第4図 ST2住居跡・EL250炉跡



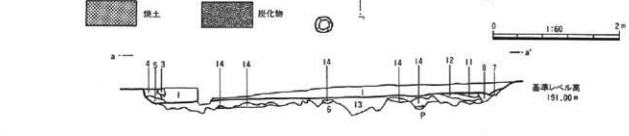
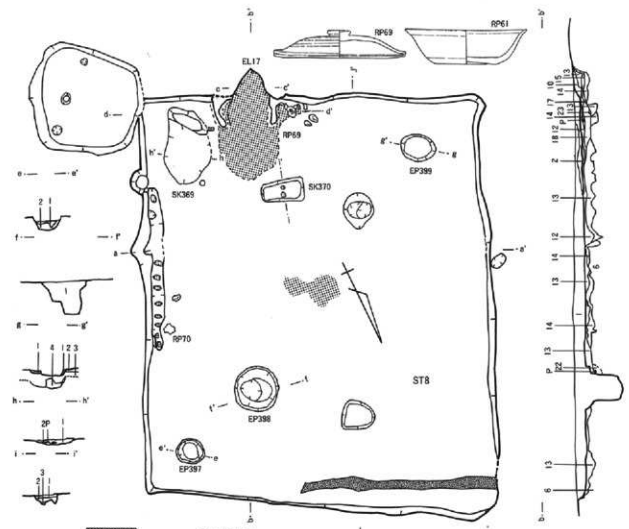
第5図 ST6住居跡・EL251炉跡



- ST3 土層記号 (a-e, b-f)
- 1: 暗褐色土 耕作土
 - 2: 暗褐色土 比較的均一、少し砂利を含む。
 - 3: 暗褐色シルト 砂利・黒土プロックを含む。
 - 4: 暗褐色土 暗褐色砂利層、小礫を含む。
 - 5: 暗褐色シルト 質砂 小礫を少し含む。
 - 6: 暗褐色シルト 質砂 砂利・小礫を含む。黄褐色シルト質砂プロックを含む。
 - 7: 黄褐色シルト 質土 砂利・小礫を含む。
 - 8: 暗褐色シルト 質砂 小礫を含む。
 - 9: 暗褐色土 砂利を多量に含む。
 - 10: 暗褐色シルト 質砂 砂りも少し多い色調。
 - 11: 暗褐色シルト 質砂 小礫を多量に含む。
 - 12: 黄褐色土 砂利を多量に含む。
 - 13: 褐色土 砂利を含む。
 - 14: 褐色土 砂利を含む。
 - 15: 暗褐色土 砂利を含む。
 - 16: 暗褐色土 砂利を含む。



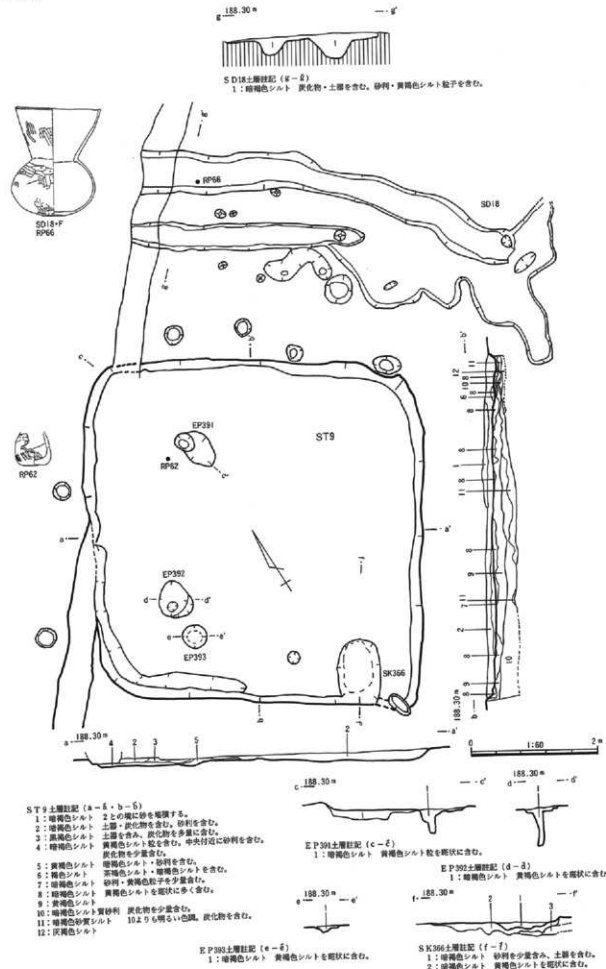
- ST7 土層記号
- 1: 暗褐色土 耕作土
 - 2: 暗褐色土 やや灰色色調、砂利を含む。
 - 3: 暗褐色土 砂り・黒土を多量に含む。
 - 4: 暗褐色シルト 質砂 砂利・小礫を含む。
 - 5: 暗褐色シルト 質砂 砂利・小礫を含む。
 - 6: 暗褐色土 砂りもやや明るい色調。
 - 7: 暗褐色土 砂利を含む。



- ST8・EL17土層記号 (a-e, b-f, c-e, d-g)
- 1: 暗褐色シルト 土層を含む。暗褐色土を多量に含む。黄褐色シルトを多量に含む。炭化物・黒土粒を含む。砂利を少量含む。
 - 2: 暗褐色シルト 暗褐色土を多量に含む。炭化物・黒土粒を含む。砂利を少量含む。
 - 3: 茶褐色シルト 炭化物を含む。
 - 4: 暗褐色シルト 炭化物を多量に含む。茶褐色シルトを多量に含む。炭化物を含む。
 - 5: 暗褐色シルト 茶褐色土を少量含む。
 - 6: 茶褐色シルト 炭化物を含む。暗褐色土を多量に含む。
 - 7: 暗褐色シルト 茶褐色シルト・砂利を含む。黒っぽい色調。
 - 8: 暗褐色シルト 茶褐色シルトを含む。
 - 9: 暗褐色土 黒土を多量に含む。炭化物を含む。
 - 10: 暗褐色シルト 炭化物を多量に含む。
 - 11: 暗褐色シルト 炭化物・砂利を含む。
 - 12: 暗褐色シルト 黄褐色土を多量に含む。
 - 13: 暗褐色シルト 黄褐色土を多量に含む。
 - 14: 茶褐色シルト 質砂 質土を含む。
 - 15: 暗褐色シルト 均一。
 - 16: 灰土プロック カマドの基礎部。
 - 17: 暗褐色シルト 土層を含む。上面に炭化物層を埋積する。
 - 18: 暗褐色シルト 上面の砂利層が、おおく残存している。
 - 19: 暗褐色シルト やや砂を含む。
 - 20: 暗褐色シルト 茶褐色土を含む。炭化物を含む。
 - 21: 暗褐色シルト 丁部材・炭化物を含む。
 - 22: 暗褐色土 黒土・黒い色調で土層を含む。
 - 23: 黄褐色砂

第6図 ST3・7住居跡

ST8住居跡・EL17カマド跡

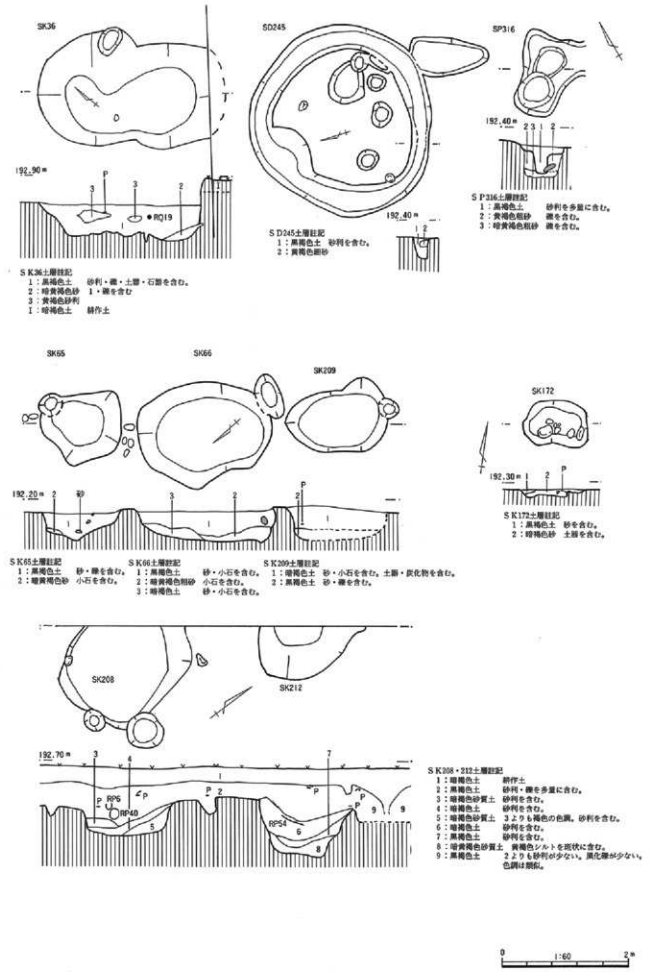


- ST9土層群記 (a-e, b-f)
- 1: 黄褐色シルト 2との境に砂を埋積する。
 - 2: 黄褐色シルト 土層・炭化物を含む。砂利を含む。
 - 3: 黄褐色シルト 土層を含む。炭化物を多量に含む。
 - 4: 黄褐色シルト 黄褐色シルト 砂を含む。中央付近に砂利を含む。炭化物を少量含む。
 - 5: 黄褐色シルト 黄褐色シルト・砂利を含む。
 - 6: 黄褐色シルト 黄褐色シルト・黄褐色シルトを含む。
 - 7: 黄褐色シルト 砂利・黄褐色シルトを少量含む。
 - 8: 黄褐色シルト 黄褐色シルトを断続的に含む。
 - 9: 黄褐色シルト
 - 10: 黄褐色シルト質砂利 炭化物を少量含む。
 - 11: 黄褐色シルト 2より明るい色調。炭化物を含む。
 - 12: 黄褐色シルト

- EP395土層群記 (e-e')
- 1: 黄褐色シルト 黄褐色シルトを断続的に含む。

- SK366土層群記 (f-f')
- 1: 黄褐色シルト 砂利を少量含む。土層を含む。
 - 2: 黄褐色シルト 黄褐色シルトを断続的に含む。
 - 3: 黄褐色シルト 砂・砂利を多量に含む。

第8図 ST9住居跡・SD18溝跡



- SK36土層群記
- 1: 黄褐色土 砂利・土層・石層を含む。
 - 2: 黄褐色砂 砂・土を含む。
 - 3: 黄褐色砂利
 - 1: 黄褐色土 耕作土

- SK65土層群記
- 1: 黄褐色土 砂・土を含む。
 - 2: 黄褐色砂 小石を含む。

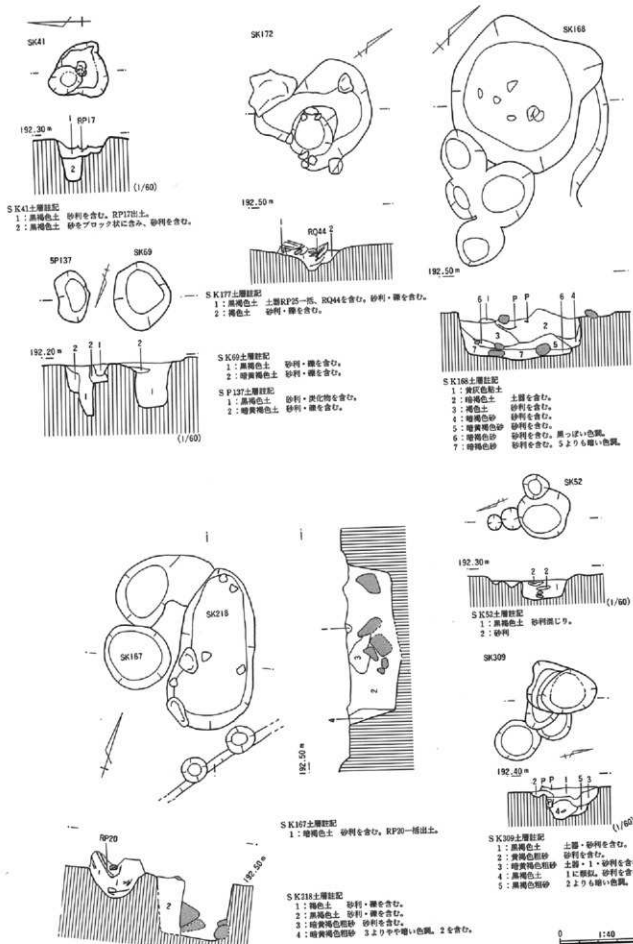
- SK66土層群記
- 1: 黄褐色土 砂・小石を含む。
 - 2: 黄褐色砂 砂・小石を含む。
 - 3: 黄褐色土 砂・小石を含む。

- SK209土層群記
- 1: 黄褐色土 砂・小石を含む。土層・炭化物を含む。
 - 2: 黄褐色土 砂・土を含む。

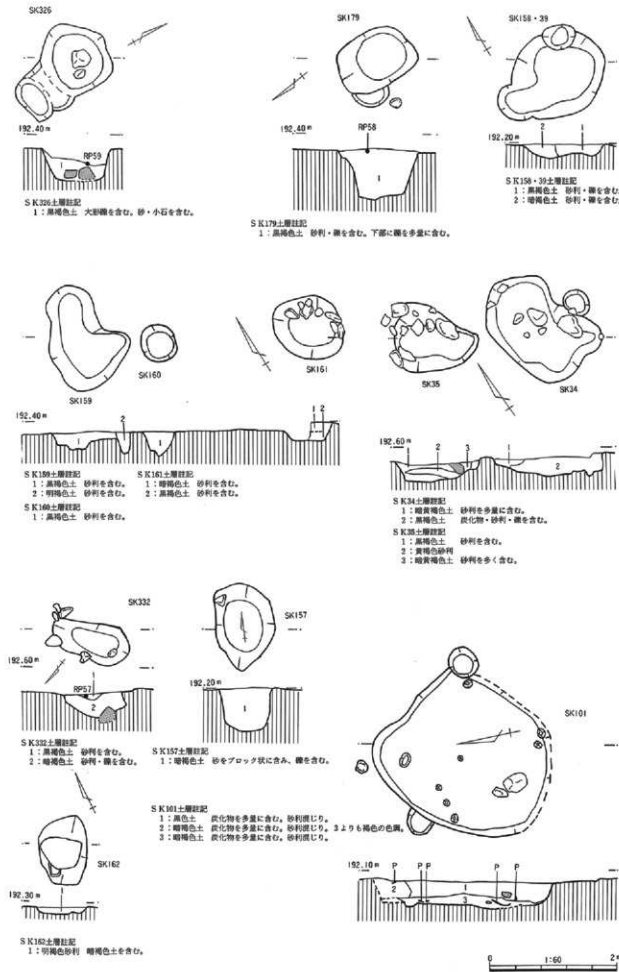
- SK308・312土層群記
- 1: 黄褐色土 耕作土
 - 2: 黄褐色土 砂利・土を多量に含む。
 - 3: 黄褐色砂質土 砂利を含む。
 - 4: 黄褐色土 砂利を含む。
 - 5: 黄褐色砂質土 3より明るい色調。砂利を含む。
 - 6: 黄褐色土 砂利を含む。
 - 7: 黄褐色土 砂利を含む。
 - 8: 黄褐色砂質土 黄褐色シルトを断続的に含む。
 - 9: 黄褐色土 2より砂利が少ない。炭化物が少ない。色調が暗い。

第9図 土層群(1)

第II章 遺構と遺物



第10図 土壌群(2)



第11図 土壌群(3)

表一 遺構計測表

遺構番号	棟号番号	図版番号	調査区	特出地帯	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	備考
ST 2	第4回	5	北側	12-19	円形	4.30	3.38	0.25	RP31 RQ21・22出土
ST 2-EL250	第4回	5	北側	12-29	楕円形	2.08	0.77	0.88	RP71a・b出土
ST 3	第6回	7	北側	14-20	円形	8.00	(3.13)	0.76	RP11・22出土
ST 6	第5回	6	北側	11-12	(円形)	(5.14)	(3.63)	0.57	
ST 6-EL251	第5回	6	北側	11-12	楕円形	2.12	0.85	0.65	RP39a・b出土
ST 7	第6回	7	北側	12-11	円形	3.17	1.32	0.70	
ST 8	第7回	8	中央	4-7	長方形	6.68	5.48	0.23	RP61・69出土
ST 8-SK369	第7回		中央	3-7	楕円形	1.22	0.75	0.69	
ST 8-SK370	第7回		中央	4-7	長方形	0.64	0.33	0.15	
ST 8-EP397	第7回	8	中央	4-6	円形	0.47	0.39	0.20	
ST 8-EP398	第7回		中央	4-7	円形	0.72	0.68	0.59	
ST 8-EP399	第7回		中央	4-7	楕円形	0.57	0.42	0.11	
ST 8-EL17	第8回	8	中央	5-7	U字形	1.08	0.92	0.83	
ST 9	第8回	9	南側	3+4-13	扇丸方形	5.43	5.36	0.25	RP62出土
ST 9-SK388	第8回		南側	4-14	楕円形	1.04	0.67	0.18	
ST 9-EP391	第8回		南側	3-13	楕円形	0.71	0.43	0.51	
ST 9-EP392	第8回		南側	3-14	略円形	0.59	0.52	0.61	
ST 9-EP393	第8回		南側	3-14	円形	0.39	0.36	0.09	
SD18	第8回	9	南側	3+4-12	長さ6.02	幅0.94	0.40	0.37	RP66出土
SK34	第11回		北側	14-15	不整形円形	1.85	1.13	0.37	
SK35	第11回		北側	13-15	不整形円形	1.32	1.06	0.31	
SK36	第9回		北側	14-16	楕円形	(2.88)	1.76	0.62	RQ19出土
SK39・158	第11回		北側	12-16	不整形円形	1.86	1.32	0.21	
SK41	第10回		北側	11-17	略円形	0.93	0.88	0.67	RP17出土
SK52	第10回		北側	11-19	略円形	0.81	0.77		
SK65	第9回		北側	12-20	不整形円形	1.26	1.10	0.47	
SK66	第9回		北側	12-21	楕円形	2.13	1.65	0.56	
SK69	第10回		北側	13-21	楕円形	1.07	0.84	0.72	
SK101	第11回		北側	13-24	円形	2.82	2.54	0.43	RP34-55-56 炭化物を多量に出土
SK109A	第4回		北側	12-19	円形	1.34	0.90	0.67	SK109A-SK109B
SK109B	第4回		北側	12-19	(円形)	(0.74)	(0.67)	0.64	
SP137	第10回		北側	13-21	不整形円形	0.81	0.65	0.83	
SP139	第4回		北側	12-19	円形	0.61	0.52	0.67	
SP145	第4回		北側	13-19	円形	0.99	0.92	0.56	
SP229	第5回		北側	11-12	(円形)	(0.58)	(0.34)	0.82	ST 6内
SK157	第11回	10	北側	12-16	不整形円形	0.93	1.35	0.63	
SK159	第11回		北側	12-16	不整形円形	1.66	1.25	0.39	
SK160	第11回	10	北側	12-16	円形	0.63	0.57	0.39	
SK161	第11回		北側	13-16	円形	1.11	1.00	0.28	
SK162	第11回		北側	12-16	不整形円形	1.12	0.81	0.11	
SK167	第10回	10	北側	11-15	略円形	0.74	0.67	0.48	RP20出土
SK168	第10回	10	北側	10-15	不整形円形	1.71	1.68	0.52	RP26・27・28 RQ29出土
SK172	第9回		北側	10-15	不整形円形	1.02	0.71	0.13	
SK177	第10回	10	北側	11-15	不整形円形	2.44	2.20	0.32	RP25-RQ44出土
SK179	第11回		北側	12-11	楕円形	1.24	0.91	0.80	RP58出土
SK208	第9回	10	北側	11-22	(円形)	(1.96)	(1.63)	0.55	RP6・33・40・41出土
SK209	第9回		北側	12-21	楕円形	1.59	1.15	0.53	
SK212	第9回		北側	11-21	(円形)	(1.51)	(0.84)	0.92	RP54出土
SK218	第10回		北側	11-16	楕円形	1.75	0.89	0.58	
SK245	第9回	10	北側	14-18	略円形	3.02	2.86	0.34	
SK309	第10回		北側	12-13	不整形円形	1.11	0.76		
SP316	第9回		北側	12-13	楕円形	0.52	0.41	0.56	
SK326	第11回		北側	11-13	略円形	1.18	1.09	0.52	RP59出土
SK332	第11回		北側	13-14	楕円形	1.25	0.61	0.45	RP57出土

2 遺物

今回の調査では、70箱の遺物出土量である。各調査区別では、北側調査区は縄文時代・弥生時代・平安時代、中央調査区は平安時代、南側調査区は古墳時代と、時期区分される。次に、主として遺構内出土遺物について、器種や時期別その内容を概括する。

① 土器・土製品

縄文土器(第12~13・15・16回 図版11~16表 2)

前期は、深鉢底部片1点である第15回(13)。わずかに丸みをもつ底面に放射状に縄文が施文されている。

中期は、口縁部に文様帯が巡りキャリパー形を呈するもので、口縁部に摺糸痕文をもつもの第16回(2)や、大形の波状口縁を呈する深鉢、頸部から緩やかに外反するものや内寄する深鉢や浅鉢で、主に体部上半に沈線及び隆起線により楕円形や曲線形のモチーフを区画し、丁寧な磨きを行い区画内に縄文や刺突文を充填する一群である第15回(1~5)、第16回(16)。また、この特徴をもつ土器では、小形の注口土器図版12、炉鉢の埋設土器図版5・6がみとめられた。第16回(13~15)は、櫛歯状の工具による刷毛目状の沈線をもつ土器で、(16)と同じ遺構出土であり同じ時期のものと考えられる。

後期は、出土数は少ない。帯状の沈線文で推定半円の磨消縄文を描くもの第16回(1)や波状口縁部に沈線を巡らし縦位の刻みを加えるものである。

晚期は、図示したは主に土壇内からの出土である。大小の深鉢・浅鉢・注口土器等の器形構成で、沈線文や磨消縄文による文様をもつ一群である。第12回(6~8・10)は、一括出土で、(6・8)は、口縁部がくの字形に外反する深鉢で、平行沈線間に斜位に連続する刷毛目施す。口縁部は平縁(6)と4単位の小突起(8)があり、3個体とも口唇部に篋状工具による小波状をつくる。(10)は、体部から内寄気味に立ち上がる深鉢で、口縁部下に3条の平行沈線文をもつ。(7)は、台付の注口土器で、体部上・中位に2段の横口縁と縦に短く刻みをもつ隆起線を巡らし、その間に雲形の磨消縄文を施す。第16回(5~10)は、沈線による区画文(6)や7条の平行沈線が加わる。また、図版13は、一括出土でやや膨らみをもつ体部から口縁部が内寄して立ち上がり、口縁部内面は短く外傾して面取りが行われる深鉢群である。地文に波線の斜縄文、流水線を描く刷毛目状の沈線文、体部上半が斜縄文で下半が刷毛目状沈線文、横位の山形押型文を施す土器群である。第16回(20~27)も同じ遺構内出土で、同一個体と考えられる。第12回(3)は、図版12と同じ遺構である。台形の浅鉢で山形の小波状口縁で3条の平行沈線を巡らす。図版12は、大きな特で口縁部には沈線による#字形の工字文を施す。

弥生土器(第12~16回 図版11~16表 2)

沈線と磨消縄文による、工字文及び変形工字文のモチーフを主体とする一群である。大きな特徴であり、縄文晩期の群との厳密な分類はできなかったが、比較的にまとまって出土したST 3住居跡出土土器群第14回(1~4)を基とした。土壇・柱穴土にも含む深鉢・浅鉢・蓋・甕の器形がある。破片資料ではあるが沈線のみで文様をつくるものと磨消縄文

によるものがある。また、文様の連結部に瘤状に2連の小突起をもつ場合がある。前者は、2・3条の沈線間に工字文や山形状に連続する変形工字文を施す。(13)は、体部から屈曲して外反する器形で、頸部は無文帯で、肩部には沈線間に刻み目を連続する。(34・38)及び第15図(28)は、細い数条の沈線を山状に描く。後者は、沈線間及び変形工字文区画で磨消縄文を加える。(14)は、さらに円形の刺突を充填する。第12図(5)は、3単位の文様で区画内磨消で横位の沈線を1条配する。第15図(19)は、浮線様に沈線を交互に入れ網状の小区画を呈する。(26・31)は、幅細い無文帯で曲線文様をつくる。第16図(3・17・18)は、口縁部が肩部から短く外反し、体部下半が筒状の深鉢や直線的に開く台形の浅鉢で、体部上半に沈線による菱形の磨消区画文が連続する。第12図(1・4)は、頸部に若干の段をもつ無文の甕である。(1)は、口縁部が少し厚みをもち、体部中位に最大径を有する撫で肩の土器である。(4)は、第16図(18)と同じ遺構である。(30)は、短い条の斜縄文下に斜め方向に4列の燃糸圧痕文が入り、その下に縦位に縄文を施す。

土師器—古墳時代(第13図 図版11・16 表2)

主として南側調査区出土の土師器である。器台は脚部が円錐台形で3個の円窓をもつ。口縁部は、直線的に外傾ないしゆるやかに立ち上がる。高坏は、脚部棒状中実で同下部が円錐台形に開く。坏部は体部下半に稜を呈する。甕は、やや扁平な体部から口縁部が長く内寄気味に立ち上がるもの、複合口縁のものや有段口縁で頸部中位から強く屈曲して稜をつくり外反するものがある。後縁の上部には、円形の浮文を貼付する。

土師器・須恵器—平安時代(第12・13・16図 図版11・16 表2)

北・南側調査区から数点とS T 8出土の須恵器である。坏は、底径が大きめで器高の低い、いわゆる回転ヘラ切り離しのものに近い形である。蓋は、天井部からやや肩が張って開くものや、なだらかに開くものがある。甕は、内外面に平行叩目の後刷毛目調整を行う。

土製品(第13図 図版11 表2)

(1)は、耳栓で側面に1条の沈線を巡らす。(2)は、中空の土偶脚部で足首及び上部部に沈線を施す。(3)は、中軸に貫通孔を通し円筒形の外面の平行沈線間に山形沈線文を3段巡らす。他に、S T 9から土製小玉がみとめられた。

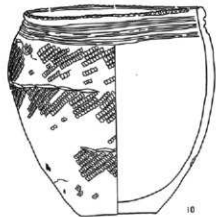
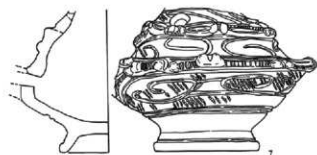
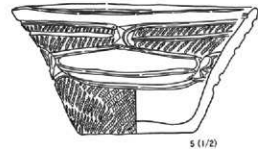
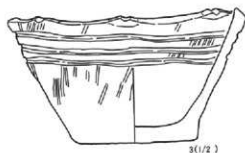
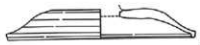
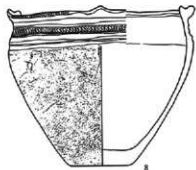
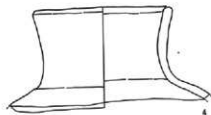
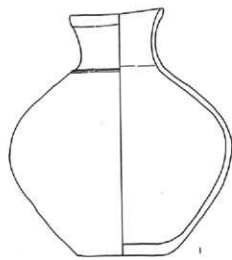
(2) 石器・石製品

石器(第17~21図 図版16~19 表2)

主な特徴別では、石鎌は、長さ約3cmで大小に分けられ、側縁部が少し湾曲のものもみとめられる。石鎌は、つまみを有するものと棒状のものがある。また、前者では、尖頭部が短いものと長いものがある。石匙は、刃部にノッチを入れるものがある。磨製石斧は、側縁部の角が緩やかで丸みをもつ断面形態である。

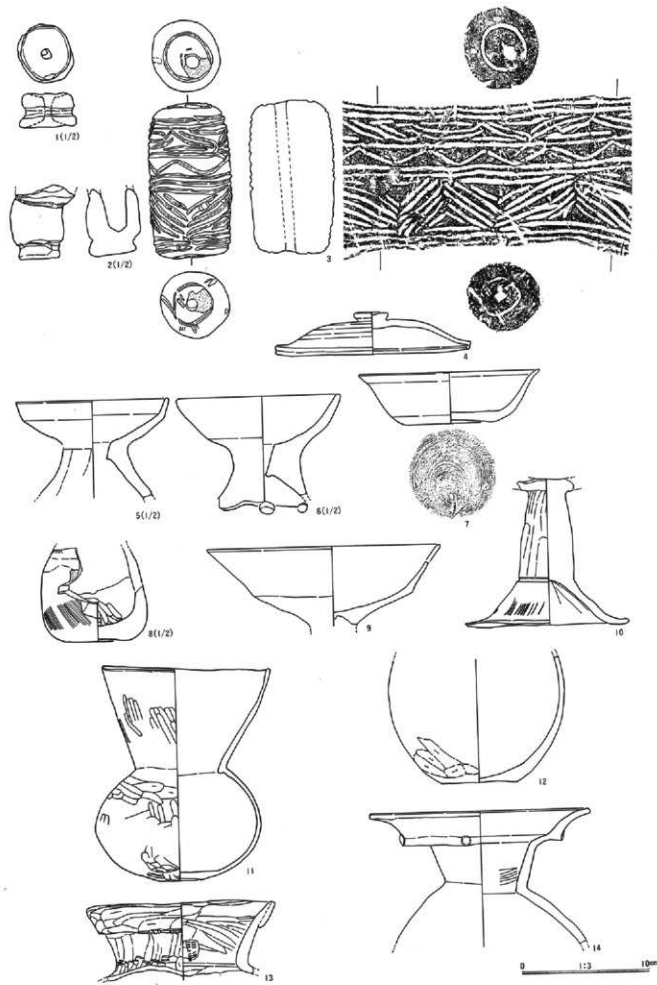
石製品(第19・21図 図版16・17 表2)

第19図(8・9)は、沈線状に溝を入れたもので、(8)は十字形に、(9)は2条の溝と極小さな円形の凹みをもつ。(10)は、自然石の外縁を打ち欠いて仕上げている。第21図(4)は、自然石の可能性も考えられるが半円形で平滑面のものである。

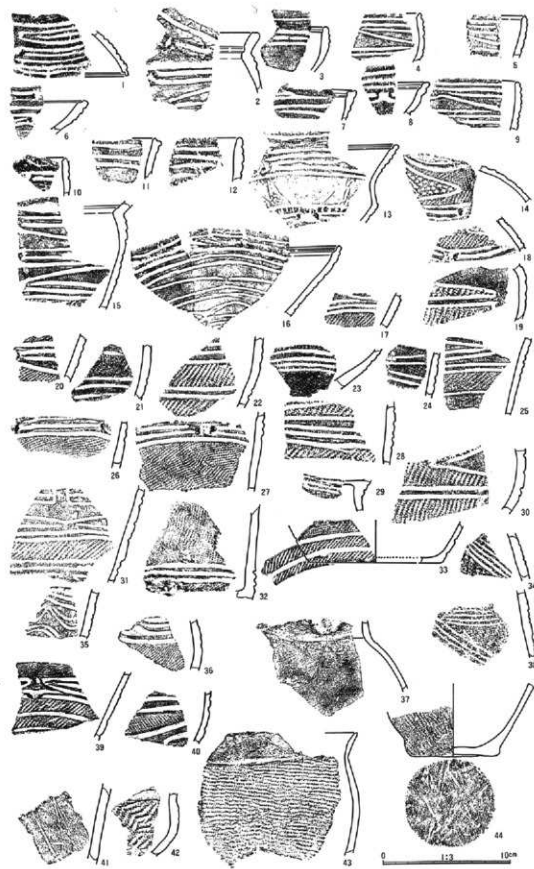


0 1:3 10cm

第12図 土器実測図(1)



第13回 土器実測図(2)



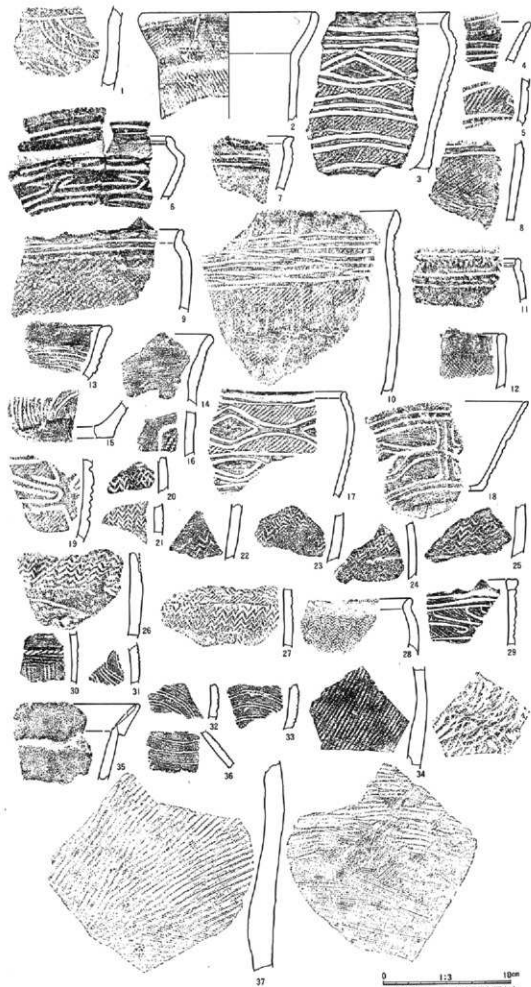
1-28 33-41-44 ST3
29-38 ST3-ED242
39-40 RP22-18

第14回 土器拓影図(1)

- 1 ST6-61.251
- 2-6 ST7
- 7-12-13 SK32
- 8 SK32
- 9-11 SK34
- 14 SK159
- 15-16 SK35
- 17-19-20 SK36
- 18-21-22 SK35
- 23-26-29-31-34-37-38 SK159
- 24-25 SK55
- 26 SK60
- 27-36 SK193
- 38 SK158
- 39 SK157
- 32-33 SK39

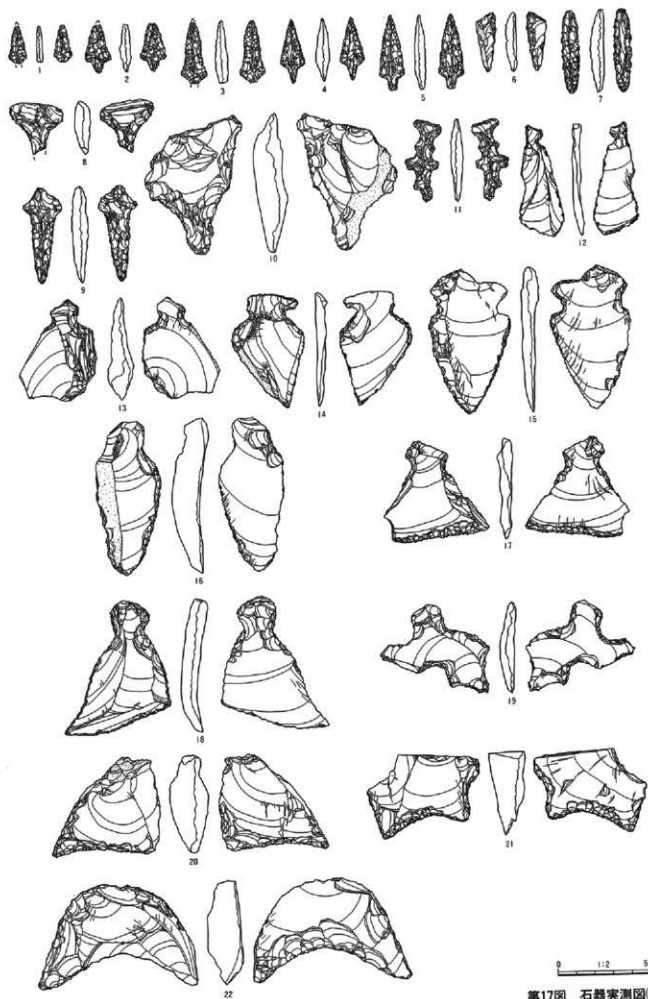


第15図 土器拓影図(2)

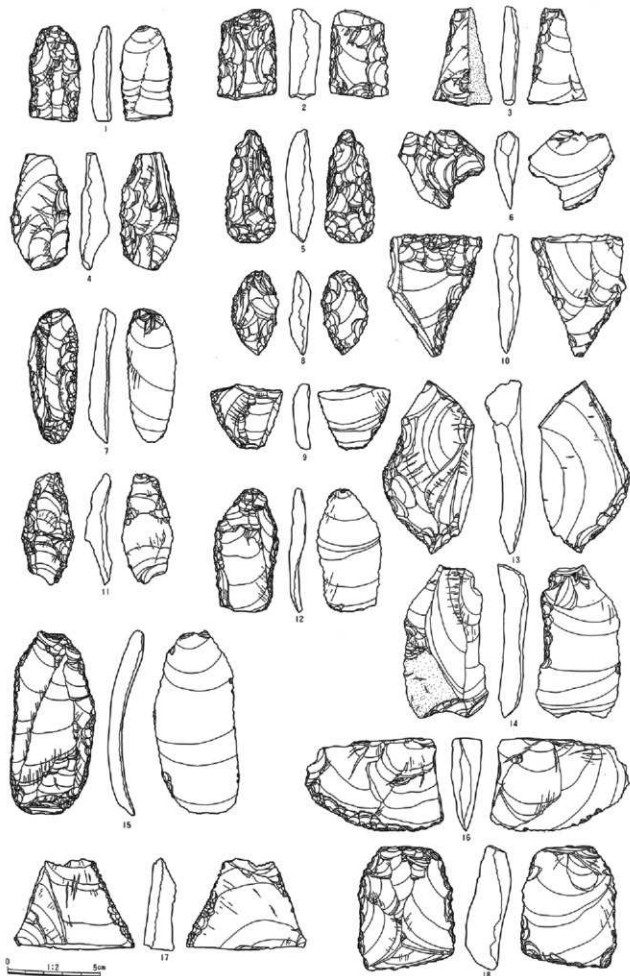
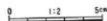


- 1 SK160
- 2 SK162
- 3 SK165
- 4 X0
- 5-10 SK168
- 11-12 SK177
- 13-16 SK172
- 17 SK326
- 18 SK332
- 19 SK332
- 20-27 SK167
- 28 SF716
- 29 SF588
- 30-34 55543
- 31-33-36 14-12
- 35 ST9
- 37 ST9(979)

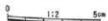
第16図 土器拓影図(3)



第17図 石器実測図(1)

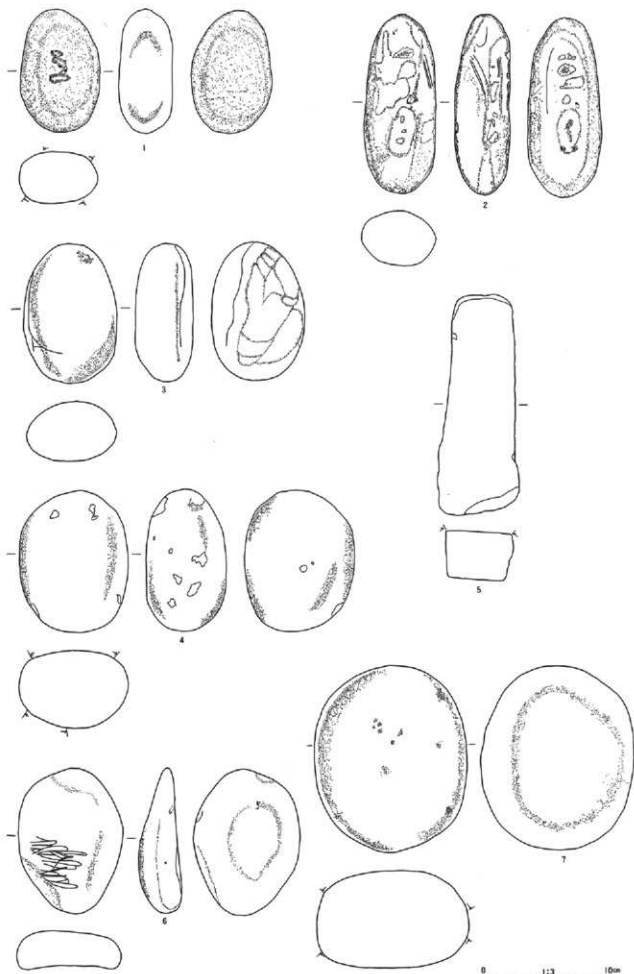


第18図 石器実測図(2)





第19図 石器実測図(3)



第20図 石器実測図(4)

第Ⅲ章 まとめ

今回の調査は、一般国道287号道路改良工事に係る緊急発掘調査である。調査の結果、多岐にわたる時代の成果を得られた。

- 1 岡ノ台遺跡は、西方に最上川右岸を望む河岸段丘上に立地する集落跡で、縄文時代前期・中期前・後葉、同晩期前～後葉、弥生時代、古墳時代、平安時代の各時期にわたる複合遺跡である。
- 2 北側調査区では、縄文及び弥生時代を主とする遺構・遺物が検出された。ST2・6は、複式炉の埋設土器の特徴から縄文時代中期末大木10式併行の所産と考えられる。第16図(20～28)の山形押型文は、県内朝日村砂川A遺跡、長井市長者屋敷遺跡、飯豊町下遺跡に類例が見られ、縄文時代後・晩期の土器に伴っての出土である。ST3覆土及び第15～16図掲載の土壇出土の土器群は、土器面の粗痕跡はみとめられなかったが、磨消縄文や変形工文字を主体とする土器群は、県内大蔵村上竹野遺跡等に類例がみとめられ、青木畑や山王田層式に併行する弥生土器群と考えられる。ST3は、直径8mと大形で、壁際に明瞭な周溝が巡る。部分的な検出であるが、県内でも数少ない確認例である。第16図(30)は、小片1点のみであるが漆糸圧痕や嵌さする縄文を特徴とする特異な土器である。

平安時代では、須恵器を出土したSK174・SD243が1基づつ検出され、付近に集落跡の分布が推定される。

- 3 中央調査区では、平面形長方形の竪穴住居跡1棟検出できた。南東寄りにカマドをもち、脇から須恵器蓋、西壁寄りに須恵器坏が出土した。時期は、平安時代9世紀代の所産と考えられる。床面下部からは、第16図(35)の複合口縁蓋の破片が出土し、重複する古墳時代前期の遺構の存在が推定される。

- 4 南側調査区は、古墳時代の遺物が出土する区域である。ST9は平面形方形の竪穴住居跡で、カマドは確認できなかった。出土土器は、甕台、高杯、壺等で中実棒状の高杯脚部の特徴から、時期は古墳時代前期(4世紀代)塩釜式の第Ⅲ段階併行と考えられる。ちなみに遺跡北東部約500mの黒麻筋跡は、今年度発掘調査が行われ、この時期の土器器を伴う方形周溝群が検出された。

今回の調査は、これまで置賜北部では未確認であった古墳文化がすでに早い段階で確実に存在することを示すものといえる。

参考文献

- 山形県、1989年、『山形県史』資料11篇 考古資料。
 山形県朝日村教育委員会、1984年、『砂川A遺跡発掘調査報告書』、朝日村埋蔵文化財発掘調査報告書第2集。
 宮城県教育委員会、1985年、『今熊野遺跡 本形跡跡 馬越石塚』、宮城県文化財調査報告書第104集。
 須藤 隆、1987年、『東日本における弥生文化の成立と展開』、『弥生文化の研究』4(弥生土器Ⅱ)、雄山閣。
 斎藤邦理、1993年、『翔手塚に集まる後北式古墳と在地弥生土器について』、『若手考古学第5号』、若手考古学舎。
 財団法人山形県埋蔵文化財センター、1993年、『黒麻筋跡調査説明資料』。
 福島県立博物館、1993年、『企画展 東北北の弥生文化』展示図録。

報告書抄録

ふりがな		おかのだいいせき ほくつちりょうきほくこしよ							
書名	岡ノ台遺跡 発掘調査報告書								
副書名									
巻次									
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書								
シリーズ番号	第15集								
編著者名	名和達朗 渡辺 薫								
編集機関	財団法人 山形県埋蔵文化財センター								
所在地	〒999-31 山形県上市市弁天二丁目15番1号 TEL 0236-72-5301								
発行年月日	西暦1994年3月31日								
所収遺跡名	ふりがな	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
			市町村	遺跡番号					
岡ノ台	おかのだいいせき	山形県西置賜郡白鷹町大字軒藤字岡ノ台	6402	昭和36年 度登録	38度 9分 45秒	140度 5分 13秒	前期 19930511～ 後期 19930722	3,017	一般国道 287号道路 改良工事
							19931020～ 19931022		
							19931101～ 19931119		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項	
岡ノ台	集落跡	縄文 前期～ 晩期	竪穴住居跡	3	縄文土器	浅鉢・深鉢 注口土器 土偶・耳杯 円柱状土製品	山形県南西部、最上川 右岸の河岸段丘上に立 地する。北側・中央・ 南側の三つの調査区が あり、北側では、縄文 時代初期前後から晩期、 弥生時代、平安時代の 遺構・遺物群が検出さ れた。中央では、平安 時代の竪穴住居跡、南 側では、古墳時代前期 の竪穴住居跡が1棟づ つ検出され、各時代に わたる複合遺跡である ことが確認できた。		
			土壇	110	石器	石鏃・石鏃 石鏃・骨状石器 円盤状石製品 有溝石製品			
		柱穴	190	石製品					
		溝状遺構	1						
		弥生中期	竪穴住居跡	1	弥生土器	台付鉢・鉢 壺			
	土壇	20							
	柱穴	1							
	古墳前期	竪穴住居跡	1	土器器	甕台・埴・壺 甕				
		溝跡	1						
	平安	竪穴住居跡	1	須恵器	坏・蓋・甕				
		溝跡	1						

報告書抄録

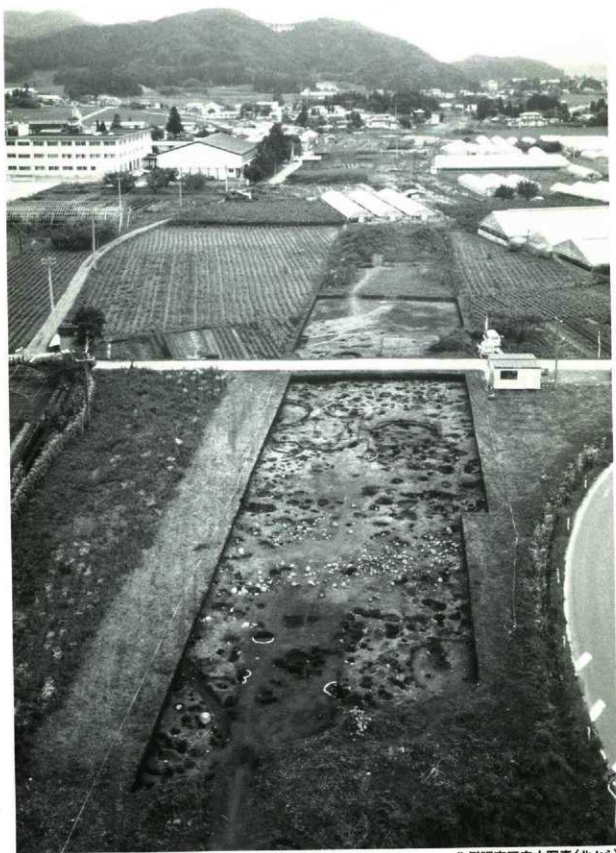
ふりがな	おかのだいいせき ほくつちょうきほうこくしょ							
書名	岡ノ台遺跡 発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第15集							
編著者名	名和達朗 渡辺 薫							
編集機関	財団法人 山形県埋蔵文化財センター							
所在地	〒999-31 山形県上市市弁天二丁目15番1号 TEL 0236-72-5301							
発行年月日	西暦1994年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
岡ノ台	山形県西置賜郡白鷹町大字畔藤字岡ノ台	6402	昭和63年度登録	38度 9分 45秒	140度 5分 13秒	前期 19930511～ 19930722 後期 19931020～ 19931022 19931101～ 19931119	3,017	一般国道 287号道路 改良工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
岡ノ台	集落跡	縄文 前期～ 晩期	竪穴住居跡 土壌 柱穴 溝状遺構	3 110 190 1	縄文土器 洗鉢・深鉢 注口土器 土偶・耳椀 円柱状土製品 石器 石鏝・石錐 石匙・磨状石器 石製品 円盤状石製品 有溝石製品	山形県南西部、最上川右岸の河岸段丘上に立地する。北側・中央・南側の三つの調査区があり、北側では、縄文時代前期前葉から晩期、弥生時代、平安時代の遺構・遺物群が検出された。中央では、平安時代の竪穴住居跡、南側では、古墳時代前期の竪穴住居跡が1棟づつ検出され、各時代にわたる複合遺跡であることが確認できた。		
		弥生中期	竪穴住居跡 土壌 柱穴	1 20 1	弥生土器 台付鉢・鉢 壺			
		古墳前期	竪穴住居跡 溝跡	1 1	土師器 器台・埴・壺・甕			
		平安	竪穴住居跡 土壌 溝跡	1 1 1	須恵器 坏・蓋・甕			

版 图



航空写真 (S = 1 : 8,000 高度 1,380 m)
写真提供 : 県土木部長井建設事務所

図版2



北側調査区空中写真(北から)

図版3



北側調査区空中写真

図版 4



北側調査区調査前状況(南西から)



北側調査区調査状況



中央調査区調査前状況(東から)



現地説明会(西から)



重機による表土除去作業(東から)



調査状況(南から)



ST9 住居跡調査風景(東から)



空撮委託状況(南東から)

図版 5



ST2 住居跡全景(南東から)



ST2・EL250 炉跡(南東から)



ST2・EL250 炉跡土層断面(南から)



RP71 a



RP71 b

図版6



ST6住居跡(南から)



ST6・EL251 炉跡(南から)



ST6・EL251 炉跡土層断面(西から)



RP39a

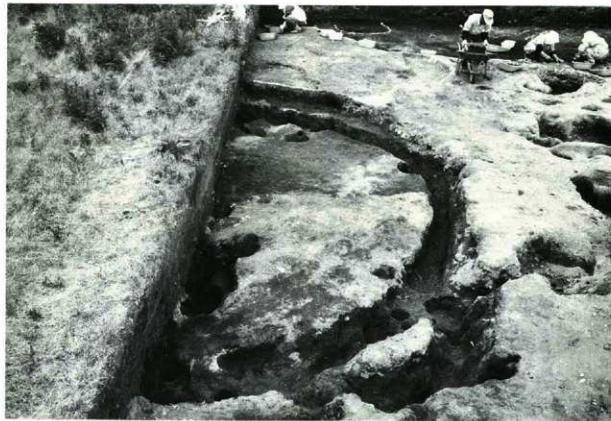


RP39b

図版7



ST7住居跡(南西から)



ST3住居跡(北東から)

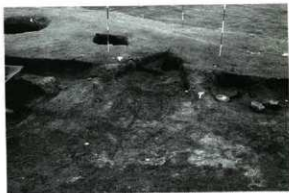
図版8



ST8住居跡全景(東から)



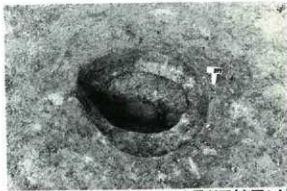
ST8住居跡全景(南から)



ST8・EL17カマド跡(北から)



ST8・EL17カマド跡土層断面(西から)



ST8・EP397土層断面(南西から)

図版9



ST9住居跡全景(西から)



ST9住居跡全景(南西から)



ST9・RP62出土状況(東から)



SD18溝跡完堀状況(北西から)

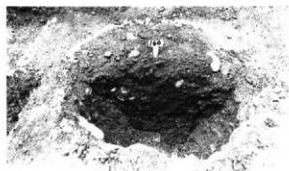


SD18・RP66出土状況(南西から)

図版10



SK157土坑(南西から)



SK160土坑(南西から)



SK167・218土坑(東から)



SK167土坑土器出土状況(南から)



SK168土坑(南東から)



SK177土坑(南東から)



SD245溝跡(南から)



SK208土坑(南東から)

図版11



12-4



12-9



13-4



13-7



13-12



13-10



13-1



13-2



13-2



12-2



13-8



13-9



13-9



13-14



12-1



13-13



13-5



13-6



13-11

図版12



12-3



12-7



12-8



12-5



12-6



13-3



12-10



ST2 住居跡出土土器 (RP23)



SK101 土壇出土土器 (RP56)

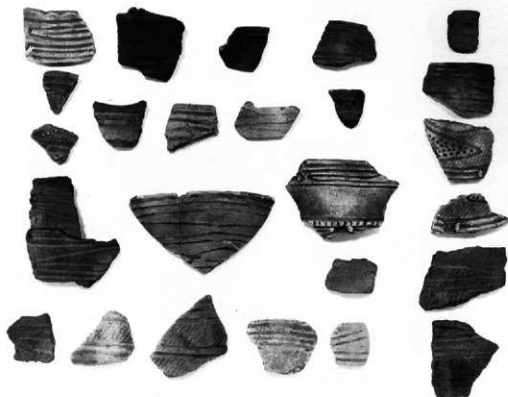


ST2 住居跡出土土器 (RP31)



ST3 住居跡出土土器 (RP32)

図版13



14-1~25



SK167 土壇出土土器 (RP20a)



SK167 土壇出土土器 (RP20b)

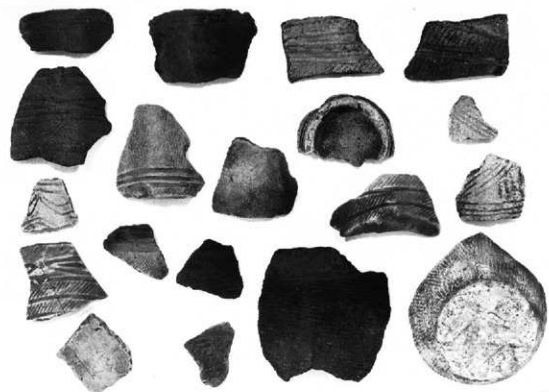


SK167 土壇出土土器 (RP20c)



SK167 土壇出土土器 (RP20d)

图版14

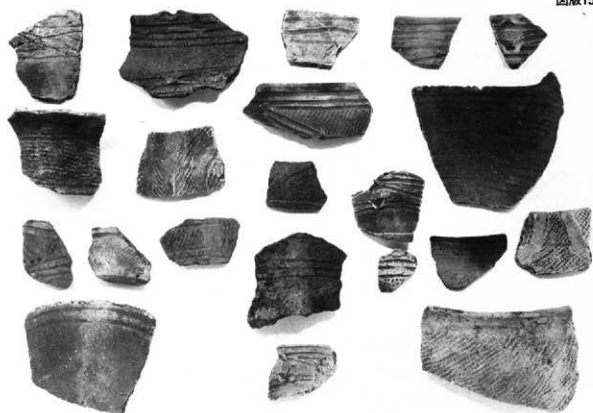


14-26~44

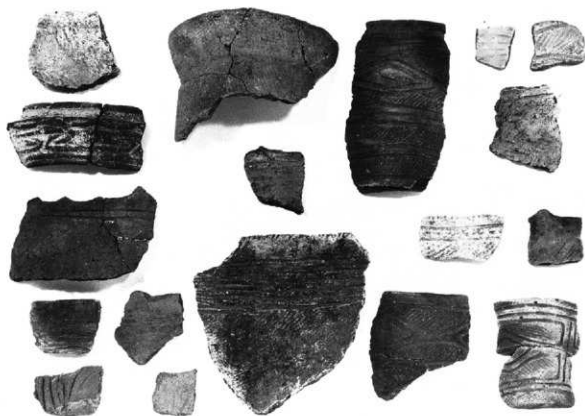


15-1~17

图版15

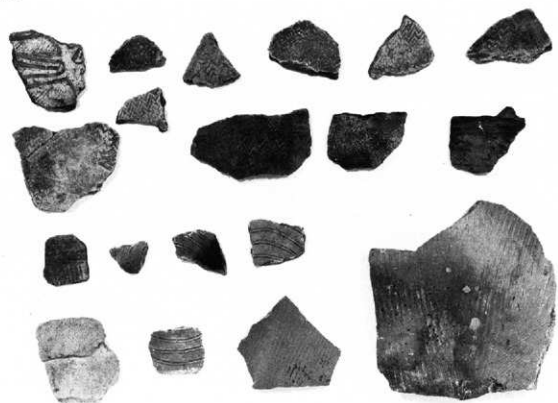


15-18~38



16-1~18

図版16



16-19~37



石鏃



同・腹面



石錐



同・腹面



異形石器 同・腹面



円盤状石製品



同・腹面

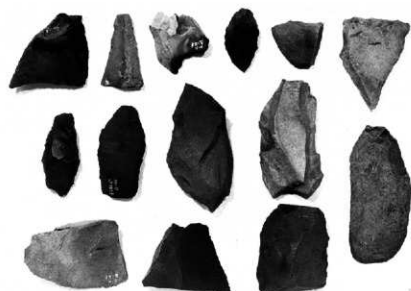


石製品



同・腹面

図版17



掻器・削器



同・腹面



有溝石製品



同・腹面



同・上面



有溝石製品



同・上面



凹石



同・腹面



磨石

圖版18



石匙

同・腹面



石匙

同・腹面



箭狀石器

同・腹面



擡器

同・腹面



磨製石斧

同・腹面



磨製石斧

同・腹面

圖版19



砥石



磨石



同・腹面

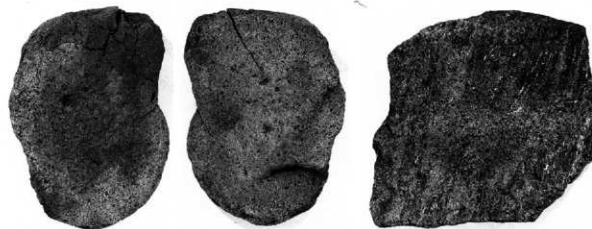


石皿



磨石

同・側面



石皿

同・腹面

石皿

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第15集

関ノ台遺跡発掘調査報告書

1994年3月31日 発行

発行 財団法人 山形県埋蔵文化財センター
〒999-31 山形県上山市弁天2丁目15番1号
電話 0236-72-5301
印刷 株式会社 田宮印刷所

1995-1179